

主 論 文 要 旨

No.1

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	三浦 文夫
主 論 文 題 目： メディアプラットフォーム構築モデルによる通信・放送の融合 ～地上波ラジオ配信プラットフォーム radiko の構築と進化～				
(内容の要旨)				
<p>本論では通信・放送融合プラットフォームの要件として経済、法社会制度、技術の統合が必要であるという認識に基づき、メディアプラットフォーム構築サイクル (Media Platform Building Cycle: MPB サイクル) というモデルを規定する。そして、具体的事例として、地上波ラジオの配信プラットフォームである radiko を取り上げ、MPB サイクルによって通信・放送の融合が実現したということを論証する。</p> <p>本論では radiko プラットフォームの構築過程を以下の3期に分ける。すなわち、第1期 IPv6 マルチキャスト配信実験 (2005 年～2009 年)、第2期サイマル配信プラットフォーム (2010 年～2017 年)、第3期拡張型オーディオ・プラットフォーム (2018 年～)。特に第2期を安定的な通信・放送融合プラットフォームが実現した時期と捉え詳しく分析する。</p> <p>MPB サイクルではビジョンを明確にした上で、経済、法社会制度、技術を統合したプラットフォームの設計が求められる。本論において、経済はビジネスモデル、法社会制度は音楽権利処理に焦点を絞り、そこで求められる技術とアーキテクチャーを中心に分析するという論証方法をとる。MPB サイクルは長期間同一のシステムでの運用を行う放送技術と逐次更新する通信技術を融合するため、一定の期間のフェーズごとのサイクルを想定している。そして大幅なアーキテクチャーの変更が生じた場合、あらたな MPB サイクルへシフトする。このフェーズ移行を MPB フェーズチェンジと規定する。</p> <p>第1期 IPv6 マルチキャスト配信実験において MPB サイクルの妥当性の検証を行う。そして、MPB サイクルによって、第2期の安定的な通信・放送融合プラットフォームが実現したことを論証する。また、通信・放送融合領域の音楽権利処理において、様々な不整合が生じていることを明らかにする。</p> <p>ビジネスモデルについては、同じ番組であっても聴取者ごとに異なる CM を配信するプログラマティック・オーディオアドを中心に考察する。また、そうした新サービス展開に伴い外部システムとの連携のために、新たなアーキテクチャーが求められる。そこで、第3期の拡張型オーディオ・プラットフォームに向けて、プラットフォームコアという共通基盤の構築が進められている。そこでは、各機能が独立し自律的に発展するために、メタデータ ID の整備と機能間の連携 IF (Interface) が重要な役割を果たす。そして、プラットフォームコアを拡張することで外部システムとの連携を広げていく。その結果、様々なサービス、プラットフォーム間がリゾーム型に接続され、従来のメガプラットフォームとは異なる独自のエコシステムを形成する可能性についても論じる。</p>				
通信・放送融合、メディアプラットフォーム、MPB サイクル (メディアプラットフォーム構築サイクル)、radiko、メタデータ ID				